

太母さんと大地の話

## 私が歩くと土が笑うの

太母さんは庭が好きな人だった。毎日庭で裸足あるいは足袋裸足で草むしりや草花の手入れをし、落ち葉を積んで堆肥をつくり、木の剪定をしていた。その間に何かもぐもぐ食べていた。草や木の葉や何かの実を食べているらしい。花も食べていた。花の蜜が好きらしい。それでいったん庭に出ると昼ごはんになっても家に入っていない。

「先に食べていて」そう言った時はもう夕方まで入っていないに決まっていた。

太母さんがいつも何故庭で裸足なのか最近になって分かった。気持ちが良いからだ。庭木の世話をする時に裸足になってみて初めてどれほど気持ちが良いか分かり、それからは裸足が好きになった。最初はわずかな石ころがあっても痛かったのがだんだんに慣れてきた。庭にいる時すぐ傍らに太母さんの存在を感じる。一緒に喜んでいるような感じがする。

「やっと分かったんだね。嬉しいね」そう言っている気もする。そこで思い出したのが、

「私が歩くと土が笑うの」という言葉だった。

土は裸足の人に踏まれ、触れられることで喜ぶのだという。以前「掌中の珠」というエッセイを書いたことがある。太母さんが、寝そべっている私の掌の上に足を乗せた時の感覚を書いたものだ。珠のようにまろやかで気持ち良かった。その感触を土だって喜ぶに違いない。土は笑うと柔らかくなり、作物は育つのが楽になる。虫たちも喜ぶ。みんな幸せ。幸せな大地からは美しい光が放たれる。すると空を行く鳥たちも喜ぶ。空も大地も輝く。輝く所で人は安らぐ。

たった一人の人が歩いたくらいでそんなに世界が変わるものか。とお考えになるでしょうが、一人の力を侮ってはいけません。ある人が輝いていると何故かそこには大勢の人が集まってきます。そして何故その人が輝いているのかを知りたいと思うのです。そこで輝いている人がどういう生き方をしているのかを見て学ぼうとします。それが人間の性分なのです。誰もが輝いて生きたいと心の底では願っているからです。

「人間は誰ひとりの例外もなく、みな幸せに輝いて生きたいと願っている。それだけと同じ。だから私には人間はたった一人にしか見えない」生前よくそう言っていた太母さん。いくつか詩を書いて、それに節をつけて唄っていた太母さん。中にこういう詩があります。

輝きて生きる和霊（われ）

探さずも我が十方（まわり）宝蔵（たからぐら）  
求めずも我が身また宝蔵  
万物（あらゆるもの）は宝物  
一つ一つを尊びて 感謝し  
大（ひろ）く安（やす）らに生きる我

宝蔵 十方無限 網多田（あみたた）に  
生りし万物（ものみな）  
宝の実（身）  
一つ一人を敬いて  
慕い合い 清く  
明るく生きる我

宝蔵 宝人（たからびと） 宝土（たからぐに）  
この世三宝大世界  
今日もまた 明日もまた  
来る年も  
生命（いのち）の限り芽育（めぐみ）なり

尊しとも 輝きて 生きる我  
尊しともや 輝きて生きる  
和霊（われ）





庭に出ることのできた最後の年の太母さん。この数か月後に脳梗塞で歩けなくなった。私が傍にいて十分な世話をしなかった為にそうなったと今は理解している。そして最後の数年、歩けない母の介護をする機会を天から与えられ、やっと親孝行のまねごとができることになり、自責の念でつぶれずに済んだ。

※ 輝きて生きる和霊は「舟を岸につなぎなさい」の中に収録されています。他にも太母さんの詩が数点収録されています。

※ 一枚目の写真は「法廷地球における最後の審判」で話をしている時のものです。今はDVDになって販売中です。